

特集2 “南紀の豊かな自然” にあたって

久保田信*



和歌山県の南部地域を南紀と言います。この地域は緑の山々が海岸まで迫り、沢山の清流が豊かな森の自然とのどかな里を通過し、自然の恵みを海にもたらしています。そこには新鮮な大気、美味しい水、深い奥山と肥沃な里山、広々とした海原、夜空の満天に輝く星があります。様々な生物が過去から連綿として多様な環境に生きており、生物種が大変豊かな南紀です。日本の自然が各地でどんどん消滅していく昨今、南紀には昔の自然が未だに残っています。おなじみのベラやフグ、そして数々の色とりどりの熱帯魚が泳ぐ海…。山際にはタヌキやシカに出くわします。家の庭にはニホントカゲやアカテガニが遊び、ケラやカブトムシが家の明かりに飛んできます。メダカの学校が田んぼのあちこちにあって、夕焼け小やけの赤とんぼが乱舞します。ホタルの光もあちこちで愛でられます。

*京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所准教授（海洋生物系統分類学）

童謡や唱歌に歌われた昔懐かしい風景が展開するのです。

このように慈父のような自然も、時として猛威を振るうことがあります。東日本大震災の半年後の 2011 年 9 月初旬、四国に上陸した台風 12 号は異常に進行速度が遅く、未曾有の大雨を何日も和歌山県に降らせ、大震災並みの被害を出し、「山津浪」という言葉さえ生まれました。豊かに見えた緑の森は自然林でなく、実は人工の植林だったのが川の氾濫を加速したのかもしれませんが。県全体で 20 億円を超える被害と聞きました。JR 列車は京都・大阪から南紀への便が少なくとも 4 日間運休しました。幹線道路の一つ、白浜・田辺を通り中辺路の山道を経由し、新宮へぬける国道を例にとっても、何箇所もの土砂崩れのため通行止めとなり、復旧活動がとても長引きました。世界遺産の熊野古道には台風の爪痕が確かに残っていますが、再び着実に南紀は元気を回復しつつあります。

本特集では、南紀の豊かな自然の一面を、多彩な昆虫、新生代中期の多様な貝類化石、田辺湾の海洋生物とその自然保護などに絞って紹介します。

(イラスト：中井英之)